江南文化と日本
——資料・人的交流の再発掘——

江南文化与日本——资料和人际交流的再发掘——

Jiangnan Culture and Japan

A Rediscovery of Resources and Human Exchange

山田奨治・郭南燕 編

Edited by

YAMADA Shoji and Nanyan GUO

INTERNATIONAL SYMPOSIUM IN SHANGHAI

2011

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘——

江南文化与日本——资料和人际交流的再发掘——

Jiangnan Culture and Japan
A Rediscovery of Resources and Human Exchange

— 上海シンポジウム 2011 —

非売品

発行日　2012年3月23日

発　行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地
〒610-1192　電話 075 (335) 2222

印　刷　中西印刷株式会社
京都市上京区下立売通小川東入る
〒602-8048　電話 075 (441) 3155

江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘——

江南文化与日本——资料和人际交流的再发掘——

Jiangnan Culture and Japan

A Rediscovery of Resources and Human Exchange

常州大学图书馆
藏书章

International Symposium

江南文化と日本

——資料・人的交流の再発掘——

江南文化与日本——资料和人际交流的再发掘——

Jiangnan Culture and Japan

A Rediscovery of Resources and Human Exchange

山田奨治・郭南燕 編

Edited by

YAMADA Shoji and Nanyan GUO

International Research Center
for
Japanese Studies

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

©2012 by the International Research Center for Japanese Studies
ISSN 0915-2822

First edition published March 2012
by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075) 335-2091
URL: http://www.nichibun.ac.jp

序言

国際日本文化研究センター（日文研）は、2011年5月27～29日に復旦大学において、第18回海外シンポジウム「江南文化と日本――資料・人的交流の再発掘――」を同大学日本研究センターと共催した。本書はそのシンポジウムで発表された論文と、事後に提出された評論を集めた報告書である。使用言語は発表者が執筆に使用した通りとし、日本語論文の編集は山田奨治が、中国語論文は郭南燕が担当した。

本シンポジウムでは、新資料の発掘と活用を通して、江南地域と日本の文化交流に対する研究を一層深めることを目的とした。前近代の日中間において、中唐以後にもっとも長く交流の窓口とされたのは、浙江から長江南岸部である。したがってこの時代に日本に伝わった文化も、その周辺地域のものが中心で、特に16世紀まではその傾向が顕著だった。近代においても、上海などの国際都市やその衛星都市は、中・日・欧の文化が触れあい、混交する舞台となった。その具体相については歴史、宗教、貿易、建築、文学、言語、芸術、環境、政治、外交などの角度から、すでに数多くの研究が長い間行われている。これらの研究進展の背景には、日中における新たな研究資料の捜索・整理や、従来から知られていた資料の再評価・紹介があることはいうまでもない。

シンポジウムでは、そのような研究現状を踏まえ、日文研の末木文美士教授と北京大学の厳绍璗教授による基調講演につづき、「文人と文化」「宗教」「歴史」「建築」「貿易」「芸術」「文化交流」の各セッションが行われ、日本・中国・台湾から28件の研究発表と討議があった。参加者は中国南部の研究者を中心に、実数で約80名にのぼった。

本シンポジウムを通して、日本と中国の諸研究機関が積み重ねてきた、資料の発掘・活用・解釈の成果を共有し、専門度の高い学術交流を図ることができた。その成果をここに公表することにより、中国南部における日本文化の研究の動向を知らしめる一助になれば幸いである。

第18回海外シンポジウム実行委員長
山　田　奨　治

目次

序言 …… 5
山田奨治

基調講演

日本における江南仏教の受容 …… 13
末木文美士

中國南方地區與日本列島之間文化交涉的歷史蹤跡考察
——東亞古代文明共同體的實像研究—— …… 23
嚴紹璗

◆第１セッション◆　文人と文化／文人与文化

テキストのなかの明州 …… 31
高橋公明

周作人の日本研究における江南文化の意義 …… 45
胡令遠　王盈

水と女の戯れ——谷崎潤一郎の中国江南—— …… 59
劉建輝

芥川龍之介における「江南」 …… 75
施小煒

◆第２セッション◆　宗教

呉越の「禹祭」から利根川の「泥祭」まで——中日の治水神話源流考—— …… 89
張愛萍

元末江南の士大夫層と日本僧 …… 111
榎本渉

◆第３セッション◆　歴史

漢晋時期における名謁・名刺についての考察
——近年出土謁刺の分析をめぐって—— …… 125
呂静　程博麗

日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向 …… 139
伊東貴之

清代江浙方志东传日本述略 …… 153
巴兆祥

◆第４セッション◆　建築

「干蘭」か「高床」か——日中建築比較論のこころみ—— …… 167
井上章一

从《碧岩录》看禅对日本古典园林的直接影响 …… 175
许金生

京都寺院园林与江南文化 …… 183
王铁军

国家权力、城市住宅与社会分层——以民国南京住宅建设为中心—— …… 189
陈蕴茜

◆第５セッション◆　貿易

日本史とアジア史の一接点——硫黄の国際交易をめぐって—— …… 201
山内晋次

薩摩塔と碇石——浙江石材と東アジア海域交流 …… 213
高津孝

十六至十九世纪前期中日贸易商品结构的变化——以生丝、丝绸贸易为中心—— …… 227
范金民

◆第６セッション◆　芸術

从夹缬的东传及流变看江南文化与日本的渊源关系 …… 241
郑巨欣

十九世纪中叶日本画家田结庄邦光的上海游记——及其与沪人笔谈资料—— …… 249
陈正宏

田结庄邦光上海游记之我见 …… 257
周保雄

日中近代演劇のネットワーク——東京・京都と上海の間 …… 265
陳凌虹

戦時下の中国趣味の流行歌 …… 279
細川周平

◆第７セッション◆　文化交流１

关于朱舜水的“东夷褒美” …… 291
韩东育

幕末・明治时期日本人对上海认识的轨迹
——从高杉晋作的《游清五录》到远山景直的《上海》—— …… 301
徐静波

他者としての異文化論説——張德彝（1847–1918）の『航海述奇』をめぐって …… 311
徐興慶

◆第８セッション◆　文化交流２

岸田吟香与海上文人圈——以1880年代中日文化交流为中心—— …… 325
陈祖恩

生死之间：多重记忆维度中的雨花台 …… 333
李里峰

明治前期に渡日した浙江商人王惕斎の研究 …… 339
王宝平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

評論

学习与探讨 …… 353
李尚全

揚州文化與日本 …… 359
趙昌智

江南文化形成发展中的日本因素——以上海为例—— …… 365
郭洁敏

総括　中日文化交流研究的新展現——略谈参会后的感受与思考—— …… 373
赵建民

総括　「江南文化と日本」における研究発表の概観 …… 377
郭南燕

プログラム …… 381
執筆者 …… 385

基調講演

日本における江南仏教の受容

末 木 文 美 士

1. 日本における中国仏教の受容

1．1．輸入文化としての仏教

私は仏教学を専攻し、特に日本仏教史を思想面から研究している。周知のように、日本の文化は、基本的にほとんどすべて中国に由来する文化を受容するところから出発している。その場合、中国から直接入る場合もあるが、朝鮮を経由する場合も多い。そのことは仏教の場合もまったく同じである。

輸入文化の特徴として、一方では先進地域の文化を最大限吸収しようとする一方、他方では、それを自国の状況に合わせて変容させていくということが挙げられる。幕末から明治維新期にしばしばスローガンとされた「和魂洋才」は、西洋から先進的な科学文明を受容しながら、それを受け取る精神的態度としては、伝統的な儒教を維持しようとした。もっとも、当然のことではあるが、そのように「魂」と「才」を二分化できるわけはなく、思想界はより複雑な変容を蒙るようになる。そこでは、西洋文明の切り取り方にも多様なあり方があるとともに、伝統思想のほうも近代化によって大きく変貌することになる。

同じことは、古代・中世における仏教の受容に関しても言える。単純に中国の仏教を日本に移植したというだけではない。そこには、受容の段階で既に偏向や選択があり、大きな歪みが見られる。情報の伝達の少ない時代にあっては、全体像が分からないままにごく一部分だけが誇張して伝えられる場合もあった。それが日本において、さらに屈折して、意図的、あるいは無意図的に日本の状況の中に適応するように変容されていくのである。

さらに仏教の場合、一般の中国思想や文化と異なって特殊なのは、単純な中国文化の受容ではないということである。中国に起源を有するのではなく、その源泉はインドにあり、中国の仏教もまた、受容文化であるということである。これは中国文化の中でもきわめて特殊なことである。中国は長く「中華」思想に立ち、まさしく世界の中心と考えられ、ほとんどあらゆる文化的要素が自国の中に発すると誇ってきた。西洋文化が伝来するまで、外来の大きな文化体系がまとまって導入されたのは、仏教が唯一であった。

それ故、中国における仏教の位置は屈折している。そもそも中国の仏教が中央アジアで変容して伝えられたということもあるが、インド系の言語と中国語では、まったく言語構造を異にしており、しかも、中国は古い文明を誇るのであるから、仏教が大きく変容するのは当然であった。しかし、どのように変容しても、外来的ということは常に意識されなければならない問題だった。それがいかに中国の伝統思想文化と調和しうるか、ということは常に問題にされ続けた。

仏教は後漢の時代に中国に伝来したが、当初は西域からやってきた人々の間で信仰されていただけであった。しかし、南北朝時代になると、南方の漢民族の地域と、北方の異民

族支配の地域の両方で広く信仰されるようになり、中国固有の儒教や道教以上の勢力を誇るようになった。その間、両者の間にはかなり熾烈な論争が交わされ、また時には破仏の断行という事態にも至った。仏教が全盛を誇ったのは唐代で、道教と並んで国家的レヴェルで採用された。この時代は、西域との交流が盛んで、中国の歴史の中でももっとも国際性が豊かな時代であり、中華思想が薄められた時代であった。仏教の新しい動向も西域を通って導入された。

宋代以後になると、このような国際性が失われ、中国固有の儒教が再編されるとともに、科挙の制度を通して、知識人の世界観の根底をなすようになって、仏教は思想界の中心勢力から外れるようになった。その頃には、インドの仏教も衰退して、滅亡することになるので、新しい外来の刺激も少なくなった。そのような状況の中で、仏教は次第に中国化して外来的な性格を失い、中国文化の統合の中の一部分を占めるようになっていく。この傾向は明代以後に著しく、儒教や道教とともに三教一致の一角を占めて、とりわけ民衆信仰の中で根強い支持を得続けることになった。

1．2．中国仏教と日本

日本の場合に戻ってみよう。そもそも文化的後発地域である日本は、前述のように、その文化の大部分を中国からの輸入に頼りながら、それを改変しつつ、自らの文化を築いてきた。中国伝来の文化はさまざまな面に及ぶが、その中で、もっとも組織的、体系的で、かつ継続的であったのが仏教であった。確かに日本がもっとも熱心に、かつ大規模に中国文化を受け入れた時期が唐代で、仏教が盛んな時代であったということもあるが、それ以後も、仏教が中国文化輸入の大きな核であり続けた。中国が儒教中心の文化の周縁に仏教が置かれるとすれば、日本は仏教が文化の中核に置かれたところに特徴がある。

その際、仏教は中国から（朝鮮経由で）渡来したものでありながら、上述のように、中国の仏教自体がインドから渡来した外来文化であるという特徴がある。そこで、日本の仏教者は、中国を経て、さらにその向こうにインドを望み見るという重層的な地理・歴史観が作られる。三国史観と呼ばれるものである。中国との関係が現実的なものであるのに対して、インドは現実味を持たない理想世界として夢想された。多くの僧侶がインドに憧れ、渡航を試みようとした。実際にインド行きを企て、途中で没した真如の例もある。このような三国史観の中で、日本と直接関係の深い朝鮮は独自性を認められなくなった。

以下、日本の仏教史を振り返り、日本の仏教が中国を受け入れつつも、そこにずれが生じ、必ずしもそのまま受容しているわけではないことを、もう少し詳しく見てみよう。

６世紀に仏教は朝鮮半島を経由して日本に伝来したが、７世紀半ば頃までは朝鮮の影響が強く、中国から入る情報は少なかった。中国の仏教が直接伝わるようになったのは、８世紀半ば以後で、遣唐使とともに仏教の書籍も多く伝えられるようになった。しかし、中国仏教の主流の動向がそのまま伝えられたわけではない。奈良時代（８世紀）の日本で確立した仏教の学問は、南都六宗と呼ばれるが、中国にはそのように六宗を特別視して体系化するようなことはなかった。そもそも「宗」と呼ばれる組織化自体が中国では必ずしも一般的ではなかった。

南都六宗のうち、勢力の大きかったのは三論宗と法相宗であり、両者は論争を繰り広げたが、これも中国にはなかったことである。中国では、三論宗がある程度勢力を持ったの

は、隋代に吉蔵によってその教学が大成された一時期のみであり、すぐに衰退した。日本への三論宗の伝来は、7世紀に朝鮮を通してであり、中国へ渡って三論宗を伝えたとされるのは、道慈（？～744）である。しかし、当時中国には三論宗といえるような学派はもはやなく、道慈が伝えたのは恐らく法相系の典籍や新来の中観派文献で、それを加味して、従来の日本の三論宗の教学を補強したものと考えられる。

法相宗は、唐代に玄奘（602～664）が伝えた新訳の唯識論書に基いて、慈恩基（632～682）が確立した。日本へは玄奘の在世中に伝えられたことになっているが、初期の伝来の状況は必ずしもはっきりしない。ただ、8世紀の前半には最新の研究状況が伝えられていたと考えられる。8世紀の後半には、三論・法相をはじめ、六宗の教学は中国の研究を消化し、きわめて高い水準に達していた[1]。

しかし、このような研究の高度化は、必ずしも仏教の実践的な発展を意味するわけではない。その後の日本仏教の発展の基礎となるのは、空海の密教と、最澄の天台学である。彼らは、ともに9世紀はじめに中国に学び、これまでの学問仏教と異なり、実践性を持った新しい仏教を確立しようとした。その際、中国から新しく齎された仏教がその根拠とされたが、この場合も必ずしも中国の仏教をそのまま伝えたわけではなかった。とりわけ最澄が学んだのは、当時やや時代遅れとなっていた天台の学問であり、都の長安を離れた江南地域の仏教であったこともあって、その正当性が問題とされることになった。中国で十分に完成した教学をそのまま輸入するのではなく、必ずしも中心的ではない地域の仏教をかなり断片的に輸入したことが、かえって日本で自由な加工を可能にしたともいえる。これについては、後ほどもう少し詳しく検討してみたい。

最澄・空海以後、円仁・円珍らが中国に留学して、特に密教を学んで帰国した。この頃には遣唐使の派遣は次第に少なくなり、仏教僧たちは、代わって海商たちによる私的な渡航を利用して中国に渡るようになった[2]。しかし、唐が次第に戦乱状態になり、排仏による仏教の衰退もあって、大陸仏教の請来は停滞するようになった。日本天台の密教の確立者とされる安然（841？～915？）は、877年に入唐の許可を得て太宰府に赴いたが、便船がなく、渡航を諦めた。安然はその後、もはや入唐を志すことなく、日本国内で密教の受法に努めるとともに、日本的な仏教の確立へと向かうようになった[3]。これは、日本の当時の仏教界の情勢の象徴ともいえるできごとであった。

この頃から約1世紀の間、中国の仏教との関係は途絶えるが、唐が滅んだ後、10世紀なかばに、五代十国時代には江南地域を拠点とする呉越国との交流があったことが知られ、その阿育王塔が日本に齎されている[4]。呉越は仏教が盛んで、戦乱で散逸した仏典を高麗や日本に求めている。宋の建国とともに、改めて交流が始まるが、特に江南地方を中心に天台の復興が著しく、日本でも10世紀後半に良源によって天台の学問の復興がなされたことから、交流がなされることになった。良源の弟子源信は、自らの著作である『往生要集』

---

1 南都六宗と中国との関係については、拙著「奈良時代における仏教東伝」（『日中文化交流史叢書』4・宗教［大修館書店、1996］）参照。

2 榎本渉『僧侶と海商の東シナ海』（講談社、2010）。

3 拙著『平安初期仏教思想の研究—安然の思想形成を中心に』（春秋社、1995）。

4 奈良国立博物館編『聖地寧波』（奈良国立博物館、2009）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com